



IFERIニュースレター第6号  
2009年3月31日発行

# IFERI

INTER-  
FACULTY  
EDUCATION &  
RESEARCH  
INITIATIVE  
NEWSLETTER  
NO. 6  
MAR. 31, 2009



張威教授 (清華大学) による  
基調講演

## 2月6-7日 第2回清華大学・北京大学・筑波大学三大学合同セミナー

張威先生(清華大学教授)と  
彭広陸先生(北京大学教授)  
をお招きして、第2回清華大  
学・北京大学・筑波大学三  
大学合同セミナーが開かれ  
ました。

平成20年10月14日(木)に行われた第1  
回清華大学・北京大学・筑波大学三大学  
合同セミナー(於中国清華大学)に引き  
続き、平成21年2月6日(金)、7日(土)  
の2日間にわたり、第2回清華大学・北  
京大学・筑波大学三大学合同セミナーが  
IFERI主催で実施されました。

本セミナーの目的は、清華大学・北京大  
学とのパートナーシップをより強固に  
し、研究者および大学院生の知的交流を  
深めることにあります。平成21年度に大  
学間交流(部局間)協定を締結するこ  
とを目指して、研究と大学院教育における  
学術交流を活性化しています。今回のセ  
ミナーの内容は日本語研究・日本語教育  
が中心で、張威教授(清華大学)、彭広陸  
教授(北京大学)の基調講演に続いて、日  
本人学生、留学生の研究発表、議論を行  
いました。さらに日・中人文研究セッ  
ションを設け、IFERI生の中国研究を紹介  
しました。研究会は、セミナー形式に  
し、十分な討議時間を確保しました。

### CONTENTS

特集：第2回清華大学・北京大学・ 筑波大学 三大学合同セミナー	1-3
異分野融合リサーチワーク ショップ	4-6
活動報告	4-7
ワークショップ「言語の国内政 策と対外政策」	7
第3期プログラム生募集日程	8
活動予定	8

### What is IFERI?



IFERI stands for "Inter Faculty Education and Research Initiative." It is an interdisciplinary organization across the Doctoral programs of the Graduate School of Humanities and Social Sciences as well as the Masters Program in Area Studies of the University of Tsukuba. IFERI was initiated by researchers of joint programs and seeks to encourage both faculty and students of single-discipline programs to engage in education and research in terms of a broader perspective. Its objective is to explore new frontiers in the Humanities and Social Sciences and to foster innovative thinking in order to better meet the ever more complex problems of our 21st century global societies.

# 第2回清華大学・北京大学・筑波大学 三大学合同セミナー プログラム

2月6日(金) 会場：人文社会学系棟B620

## 午前の部

9:50 開会の辞

9:55 挨拶 坪井美樹(人文社会科学研究科長)

## 基調講演

10:00 張 威(清華大学)

国語教材の実態調査からみる複合動詞習得のあり方：  
第二言語習得における複合動詞学習方略を見直すために

11:00 彭 広陸(北京大学)

中国人日本語学習者向けの日本語教育文法：品詞体系  
を中心に

## 午後の部

### 【セッション1】人文社会科学研究

14:00 和久 希(筑波大学大学院 哲学・思想専攻)

経学としての「文学」：六朝文論の視点から

14:30 飯野 知宏(筑波大学大学院 歴史・人類学専攻)

1950-60年代、台湾東部における社会建設の研究：  
宜蘭県礁溪郷の事例を中心として

15:00 王 冰(筑波大学大学院 国際日本研究専攻)

現代中国の市民社会における「公共圏」の構築：  
『南方週末』『南方都市报』の四川地震報道を事例に

### 【セッション2】日本語研究

15:45 王丹丹(筑波大学大学院 文芸・言語専攻)

日中語における任意の解釈をもつ空範疇の生起につい  
て：任意のモノを表す場合を中心に

16:15 金成 姫(筑波大学大学院 文芸・言語専攻)

「否定のスコープと焦点」について

16:45 田川 拓海(筑波大学大学院 文芸・言語専攻)

間投用法の「ね」の認可条件について：統語論と音韻  
論の接点

2月7日(土) 会場：共同利用棟A102

### 【セッション3】日本語教育・言語教育

10:00 伊藤 秀明(筑波大学大学院 地域研究研究科)

中国人学習者における相対他動詞の習得状況の分  
析：自他選択の判断要因から

10:30 許 挺傑(筑波大学大学院 国際地域研究専攻)

中上級日本語学習者の発話ストラテジーについて：  
KYコーパスの分析から

11:00 蔡 葶葦(筑波大学大学院 国際日本研究専攻)

結果存続表現における使用意識：アンケート調査とグ  
ループディスカッションを通して

## 学生による研究発表の概要



和久希：この発表では、まず国木田独歩と内村鑑三を例に、1897年に「文学」という言葉に関して異なった見方が存在するということを指摘した。その異なった見方とは、ヨーロッパ流の文学（現代我々がいう「文学」）と、後世に思想を伝える具体的手段としての「文学」である。次に発表者は『論語』からの歴史的堆積を検証し、それ

を踏まえつつ、六朝文論の「文学」について論じた。六朝文論の先駆となった曹丕における「文学」や「文章」の検討を通して、六朝文論の「文学」は現代的な意味での「文学」に近似するものではなく、むしろ『論語』以来の用例同様先人の規範を継承し、そして、加えて自らが後世に対する規範を遺すことという二重の意味で、伝統的儒教を踏襲するものであるという結論を導いた。

飯野知宏：この発表は、1950-60年代の台湾における社会建設の1つである基層民生建設運動に注目し、中国国民党による地域社会への支配の浸透と国家意識と国民意識の形成を考察した。

まず、北京語補習を行う民衆補修班に注目し、北京語の教科書には、農村生活に関する記述のほかに、中華民国国民としての意識形成を促すと思われる内容が多く盛り込まれていたことが分かった。本発表の基層民生建設運動についての分析を通して、中国国民党政権による基層社会把握の過程の一側面が明らかになった。





**王冰**：本発表は、2008年5月12日から8月までの『南方週末』『南方都市报』の四川地震報道を事例とし、中国の市民社会の実態を明らかにすることを目的とする。発表者は、まず、問題意識を述べ、本研究の意義を述べた。また、研究方法を紹介した。その後、国内新聞記事、日本をはじめとする外国記事の収集、記者へのインタビュー、政府部門の通達、条例の収集などについて詳しく述べた。

**王丹丹**：本発表は、日本語と中国語における任意のモノを表す要素「物」、「东西」(dong xi) とゼロ要素の交代について考察し、任意のモノを表す「物」と「东西」は目的語位置において顕在的に出現することが要求され、脱落しにくいという現象を指摘した。また、その理由として「空目的語の性質と関与している」からではないかと考察を行った。さらに、本発表の考察は、任意の解釈をもつ空範疇は目的語位置に生起しないという先行研究(Kuroda 1983等)の主張を支える証拠となることを示した。

**金成姫**：本研究では、日本語と中国語の否定辞と、その否定のスコープ・焦点について考察した。特に、複合述語や結果可能構文(否定文)で見られる両者の相違点について考察し、記述した。

**田川拓海**：本研究では(a)いわゆる間投助詞の「ね」について、その分布の条件についての記述を試み、特に間投助詞が

現れないいくつかの環境について詳しく見る、(b) (a)の記述をもとに、統語論の情報と音韻論の情報の関係、および削除という現象について考えるというように2点を目的としている。問題となる現象を明らかにするため、「間投助詞「ね」の分布はある程度の大きさの音韻論的単位に付加することができる」と「「ね」は何らかの音形を持たない要素に直接後接することはできない」というような仮説を立て、数多くの実例をもとに考察を加え、検証を行った。

**伊藤秀明**：これは従来の日本語相対他動詞の習得研究へ批判的検討を加えた上で、ビデオを用いた文完成法タスクとフォローアップインタビューとを方法とした調査報告をするものであった。その結果、従来述べられてきた「自動詞の習得が困難である」とする結果を支持するに加え、それが学習者の「他動詞でなければ自動詞である」という判断によるものであることが指摘された。また、自動詞の判断要因は曖昧であるが、他動詞の判断要因が学年によって変化することもこの指摘を保証するものであるという。さらに解答の根拠を「聞いたことがある」とする学習者について、それがインターネットによる日本語への接触機会の増加によるということが指摘された。

**許挺傑**：これは学習者がネイティブ・スピーカーと会話する際に生じたコミュニ

ケーション上の障害を解決する手段(コミュニケーション・ストラテジー=CS)の中でも、とりわけ話し手としての「発話ストラテジー」に着目するものである。これまで初級・中級学習者を対象に研究が進められてきたが、本発表は上級学習者の特徴について、中級学習者との比較を通じて検証した。先行研究の分析枠組に沿って、上級学習者も多くのCSを用いていることを導き、特に「パラフレーズ」や「外国語化」といったストラテジーについて具体的に検討するものであった。

**蔡亭蔵**：これは日本語教育の初級段階から見える結果存続表現について、これまでに十全な取り組みが僅少であるという批判の上に、アンケート調査やグループ・ディスカッションを行ったことの報告である。発表者が独自に行った調査結果を詳細に示し、その表現を「より対象にフォーカスするもの」と「より動作主にフォーカスするもの」に分類し、各々の表現の関係を位置づけるものであった。

\*

両日ともに多くの参加者があり、それぞれ発表に対してフロアから鋭く切り込んだ質問があった。また、張威先生(清華大学教授)と彭広陸先生(北京大学教授)からもコメントをいただいたことに感謝したい。全体的に熱を帯び、充実したセミナーであった。



## 活動報告

### 2008年度第4四半期

#### 2009/2/2-4 社会科学特講(2)II

集中講義「中央ヨーロッパにおける言語政策と社会」(社会科学特講(2)II)が開講されました。講師はAndrej BEKEŠ先生(スロベニア共和国リュブリャナ大学文学部教授)。



#### 2009/2/4 講演会：病の語りー身体・社会・共感可能性(1)

宮地尚子先生(一橋大学社会学研究科教授)をお迎えして、講演会「トラウマについて語るということ：環状島モデルと学際研究」が開催されました。トラウマを語ることの困難さを理論的に明らかにする試みとして、「環状島モデル」を用いた症例のメタファーの解釈が紹介されました。

#### 2009/2/6-7 第2回清華大学・北京大学・筑波大学三大学合同セミナー

本誌1-3ページをご覧ください。

#### 2009/2/9 講演会：病の語りー身体・社会・共感可能性(2)

西村ユミ先生(大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授)をお迎えして、講演会「看護ケアと現象学」が開催されました。植物状態患者と看護師間のコミュニケーション(相互作用)という臨床的経験をいかに理解すべきか、現象学的な立場から解説がなされました。

#### 2009/2/20 ワークショップ：言語の国内政策と対外政策

本誌7ページをご覧ください。

#### 2009/2/20, 23

異分野融合リサーチワークショップ合同報告会が行われました。

#### 2009/2/23

第8回IFERI運営委員会が行われ、電子ジャーナルの投稿規定、来年度のプログラム生募集、活動計画、非常勤研究員の雇用等について審議しました。



# 異分野融合リサーチ ワークショップ

2-3学期の異分野融合リサーチワークショップ(通称、IFセミナー)では、毎回1-2名のプログラム生が自分の研究テーマについて発表をおこない、2名の指定討論者(異分野のプログラム生)を中心として濃密なディスカッションを展開しています。ここでは、後期プログラム生5名の発表を紹介いたします。

1月26日のIFセミナーでは、和久希(哲学・思想専攻 4年)が発表を行い、今井信治(哲学・思想専攻 4年)、古田高史(国際日本研究専攻 D1年)が指定討論者をつとめました。

### 六朝言語哲学の東方展開

#### — 儒教・玄学・文学 —

和久希(第1期プログラム生)

本発表は標題の研究課題についての説明および発表者のこれまでの取り組み、成果、そして今後の展望について簡単な紹介を行い、異分野の研究に取り組んでいるプログラム生との討議を通じ、発表者の研究に新たな視座をもたらそうとする試みである。

発表者の研究課題「六朝言語哲学の東方展開—儒教・玄学・文学—」は、魏晋玄学、魏晋六朝の文論を経て、我が国の平安期、より具体的には空海に至るまでの言語思想の展開を究明するというものである。その方法は漢籍資料を対象とした文献学的考証によるものであるが、異分野間対話を趣意とした本発表では原文

と訓読とを示し、必要に応じて口頭で私訳を加えるにとどめ、主にプレゼンテーション・ソフトを用いた概念図をもとに、本研究の梗概を述べた。

魏晋玄学における形而上学的思索と言語との関係について、本研究では魏の何晏、王弼および東晋の欧陽建を取り上げ、各々の論理を解説し、魏晋玄学において言語と知がどのように捉えられていたか、という思念を提示した。そしてその検討にもとづいて、六朝期の文論とりわけ『文心雕龍』と『詩品』を取り上げて、経書『易経』『詩経』との関連からそれらの言語思想について言及し、その思索の背後に魏晋以来の言語思想の堆積があるということを論証した。以上がこれまでに発表した個別的な研究成果の概要である。

本研究のもう1つの課題は、これらの「東方展開」についての検証である。これについては、研究のプライオリティに鑑みて本稿に記すことはできないが、これまでの研究史の所在と、本研究の展望を述べ、また、一次資料にもとづいた研究構想の裏付けを行った。





2月16日のIFセミナーでは、王冰（国際日本研究専攻 D1年）と古田高史（国際日本研究専攻 D1年）が発表を行い、北川直緒（現代語・現代文化専攻 1年）と黄媚（現代文化・公共政策専攻 4年）が指定討論者をつとめました。

### 現代中国のマスメディアによる「公共圏」の構築：南方報業メディア集団の事例を中心に

王冰（第2期プログラム生）

**研究概要：**本研究は中国のマスメディアの現場からその現状を捉えることを目的とする。本研究を通して、現代中国ではマスメディアによって形成される「公共圏」がどのようなものなのか、その特徴が何であるかを明らかにする。そのため、新聞社に注目してその実際の動きと政府主導のメディア改革の関係について明らかにする。従来、マスメディアの役割は、市民社会の視点からは十分に論じられてこなかった。本研究は現代中国のマスメディアのあり方、公共性についての検証を通して中国市民社会研究に貢献するものである。

**現地調査の報告：**2008年12月中旬から今年1月中旬まで南方報業メディア集団へ現地調査を実施した。調査内容は『南方日報』、『南方週末』と『南方都市报』の記者へのインタビュー、アンケート調査、そして四川大地震報道についての聞き取りなどである。現地調査を通して、新聞社の広告経営、融資活動、人事、社員の給料、報道活動、政府との関係、記者個人のネットワーク、報道意識などについての情報を収集した。またアンケート調査を実施し、約30名の記者から回答を得た。

### 昭和期日本の政治・社会・文化システムの変遷：福田恆存の『批評』を事例に 古田高史（第2期プログラム生）

今回のIFERIセミナーでは、今年1年間の研究内容について報告した。本プログラム研究は、福田恆存という人物

を研究することで、昭和期日本という時代に見られる政治・社会・文化の構造を掴もうとするものである。福田恆存は、昭和期日本において、文芸評論をはじめ、政治・社会評論、さらには、演出家、翻訳家など多様な活動を展開した人物である。こうした福田の諸活動は、同時代の影響を受けつつ展開されたものである。そのため、福田研究は、昭和期日本の構造的な理解につながるのである。

今回の報告では、本プログラム研究の一例として、福田の芥川龍之介論(1941、1942年)とD.H.ロレンス論(1942年)についての研究を紹介した。福田の芥川論、ロレンス論には、福田の「民衆」観が表れている。両作家論における「民衆」に関わる表現は複雑なものになっている。それは、両作家の「民衆」観、福田のそれ、さらには同時代の状況などが相互に影響しあう中で生まれたものといえよう。そのため、本研究は、(1)芥川、ロレンス自身の「民衆」観と福田の両作家論のそれとの比較、(2)同時代の批評家（小林秀雄、保田與重郎ら）の民衆観との異同の考察、(3)同時代の「芥川研究」、「ロレンス研究」との関連性、(4)福田批評の初出雑誌の検討という方法から、福田の「民衆」観を、「歴史的・政治的な文脈」の中で解明しようとするものである。本研究は、ロレンスや芥川の昭和期日本での受容の一例を示すことになる。また、ロレンス、芥川、福田を比較文学的に研究するものである。さらには、本研究により、福田とその周辺の「歴史的・政治的な文脈」が明らかになる。それゆえ、本研究は、ロレンスや芥川という各作家の受容研究、比較文学研究をはじめ、昭和期の歴史、社会、政治研究にも貢献するものといえよう。

2月23日のIFセミナーでは、久保慶明（現代文化・公共政策専攻 3年）と今

## 活動報告

### 2008年度第4四半期

2009/2/24

第1回IFERI評価委員会が開催されました。出席者は下記の教員7名および学生6名でした。

- 坪井美樹（人文社会科学研究科長）
- 青木三郎（IFERI運営委員会委員長）
- 川那部保明（現代語・現代文化専攻長）
- 遅野井茂雄（国際地域研究専攻長）
- 津城寛文（哲学・思想専攻教授、人文社会科学研究科FD委員会委員長）
- 中野目徹（歴史・人類学専攻教授、人文社会科学研究科企画評価委員）
- 関根久雄（国際公共政策専攻教授、人文社会科学研究科企画評価委員）
- 入山美保（平成19年度選抜前期プログラム生）
- 長谷川詩織（平成19年度選抜前期プログラム生）
- 和久希（平成19年度選抜後期プログラム生）
- 北川直緒（平成20年度選抜前期プログラム生）
- 小田桐奈美（平成20年度選抜前期プログラム生）」
- 久保慶明（平成20年度選抜後期課程生）

学生評価委員は2月に事前に実施したIFERIプログラム生へのアンケートを集計し、その内容をまとめた資料に基づき意見を述べました。教員評価委員からも、人文社会科学研究科におけるIFERIの教育・研究活動に関する問題点の指摘や提案がなされました。

2009/9/26 講演会：オーストラリアの言語政策

Nonna Ryan 先生（オーストラリア Macquarie大学名誉准教授）を講師に迎え、上記の講演会（英語）を開催しました。



# 活動報告

## 2008年度第4四半期

2009/9/28 講演会：ロシア・ハルビン・オーストラリア 在豪ロシア系移民の言語の保持と消失

Nonna Ryan 先生を講師に迎え、上記の講演会（英語）を開催しました。



2009/3/2 セミナー「ラウンドテーブル：英語話者を対象とした外国語としてのロシア語教育」

Nonna Ryan 先生を講師に迎え、上記のセミナー（英語）を開催しました。

2009/3/4 第2回IFERI言語・文化・思想シンポジウム

プログラム生有志が中心となって、自主研究会「第2回IFERI言語・文化・思想シンポジウム」を開催しました。今回は「『知』をめぐる文化」を副題とし、各々の専門領域から「文化」を主題とした発表を行いました。古典から現代、洋の東西を異にする各発表者の提言は、各々の抱える「文化」概念を多角的に省察する機会となりました。

- 天田顕徳「現代の聖地における宗教と伝統文化の位相：熊野を事例に」
- 松枝世「『自殺系サイト』では何が語られているのか？」
- 古田高史「福田恆存の日本語論：戦前・戦中期を中心に」
- 今井信治「情報文化と宗教の混淆：カリフォルニアン・イデオロギーをめぐる」
- 和久希「雕龍可期：六朝文論から空海へ」
- 戸部篤「比較言語学の誕生：人々は言語学に何を求めたか」



井信治（哲学・思想専攻 4年）が発表を行い、飯野知宏（歴史・人類学専攻 2年）と長谷川詩織（文芸・言語専攻 2年）が指定討論者をつとめました。

### 市町村における税制をめぐる政治過程： 「地方政治経済学」の視点から 久保慶明（第2期プログラム生）

【研究概要】1990年代以降、地方分権改革が進んでいる。2000年には地方分権推進一括法が施行され、2004年には三位一体改革が行われた。このような状況下で地方自治体の自律的な税財政政策がますます重要になっている。しかしながら、自治体の租税政策を対象とすると、先行研究はほとんどない。そこで本研究では、戦後の自治体租税政策の実態を明らかにすることを目的とする。これにより、分権型社会において自治体がいかなる租税政策を実施していくのか（あるいは実施すべきなのか）に関する示唆を得る。研究にあたっては、政治学、地方自治論、経済学・財政学の3つを融合した「地方政治経済学」という視点から分析を行う。手法としては、①量的分析と②質的分析を補完的に用いる。

【研究経過】現在までの研究経過として、①については、2000年以前と2000年以後に分けて、独自課税（法定税超過課税・法定外税）実施自治体数の変遷と、比較対象として都道府県における実施自治体数を報告した。全体として、個人住民税の超過課税実施自治体は1970年ころまでに激減し、法人関連税の超過課税を実施する市町村は横ばい（あるいは微増）傾向にあることを示した。このような状況にある要因を探るため、2008年度に行った事例分析の概要も紹介した(福岡県太宰府市「歴史と文化の環境税」、沖縄県伊是名村「環境協力税」)。

### 先進資本主義諸国における 「精神世界」の包括的研究：大衆文化・ メディア空間・ニューエイジ 今井信治（第2期プログラム生）

本発表は、表題に掲げる研究課題の背



景と意図を伝えることで、発表者の研究活動を紹介することを旨とするものである。とりわけ、本年度最後のIFセミナーであることも鑑み、2008年度の活動報告を通じて本研究の目指すところを明らかにした。その上でIFERIプログラム生から質疑を賜り、異分野からの視座を取り入れながら研究計画に新たな息吹を取り入れる試みである。

発表者の研究課題「先進資本主義諸国における『精神世界』の包括的研究：大衆文化・メディア空間・ニューエイジ」は、その副題の示す通りに対象が大きく3つに分けられている。問題関心/キーワードを一にしながらも領域を異にするそれぞれの研究を概略的に述べることで、各個に通底する思惟・思索、集約点を示すことを目指した。

「大衆文化」研究では、埼玉県・鷲宮神社へ「聖地巡礼」と称し訪れるアニメ・ファンの動向を、当神社の奉納絵馬分析から行っている。「メディア空間」（あるいはComputer Mediated Communication）研究では、2008年6月の秋葉原連続殺傷事件において、犯行前に大量の書き込みがWeb上へなされたことに着目し、メディア空間が現実空間に対してコミュニケーションの優位に置かれる場面を指摘した。「ニューエイジ」研究では、「スピリチュアル・コンベンション」（現「スピリチュアル・マーケット」）を題材に、宗教資源がその文脈を脱色されながら商品化され、「宗教」ではない「スピリチュアル」なものとして消費されている様子を描き出した。

発表者の研究関心は、「脱文脈化された宗教が現代社会においてどのように援用されているか」、そして「そのリアリティがどのようにして担保されているか」にある。個別の発表/論文はそれぞれで完結させているが、今回このように整理し、発表することにより、プログラム生と問題意識の共有を図り、そこから今後の展望を見出す機会が得られたと考えている。



## ワークショップ 言語の国内政策と対外政策

日比谷潤子先生（国際基督教大学副学長）をお迎えして、ワークショップ「言語の国内政策と対外政策」が行われた。第1部はプログラム生による研究発表が行われ、第2部は日比谷潤子先生に「コーパスを用いた日本語研究と日本語教育」と題してご講演いただいた。

### 第1部（10:00~12:00）の概要

#### 言語教育における2面性と対外言語普及政策（李炅澤）

国内言語教育に存在する、言語の平等を唱える側とそれとは対極にある言語による支配関係を、2つの軸に捉え、それが実際の国際の場における言語教育にも存在することを主張する。その具体的な例としては、ドイツにおける論争とEU等の地域共同体で行われる言語教育のスタンダードを例として挙げた。結論として、対外言語政策においても存在する上記の支配関係の言語教育を最小限に抑えるためには、言語教育を個々人の懸案問題としてだけでなく、社会全体の信頼関係に基づいて対応する必要があることを主張した。

#### キルギス共和国における国家語政策にみられる言語観：2008年国家語の日記念祝典を事例として（小田桐奈美）

発表者は、中央アジアのキルギス共和

国における、独立以降の国家語政策を研究対象としている。本発表では、2008年9月26日に開催された「国家語の日」を記念する祝典を事例とし、プログラム、出演者、掲示物等を分析することにより、国家語発展政策の基盤となる言語観を明らかにすることを目的とした。その結果、「キルギス人はキルギス語を話すべき」、「キルギス国民は民族を問わずキルギス語を話すべき」といった、言語を民族・国民と結び付けようとする言語観が明らかになった。今後の課題は、より多くの事例を基にし、より広い視野から言語観に迫ることである。

#### キルギス共和国における日本語学習デザインとは：キルギス共和国の日本語教育の現状から（入山美保）

キルギス共和国は日本と関係が浅い国であるにも関わらず、日本語学習者数は人口比で中央アジアの中で一番多い。学習者は、日本語をいかした就職、日本への留学を希望しているが、そのような機会がほとんどないのが現状である。今後の日本語学習デザインとして、相互理解促進活動や自律学習への支援、通訳や教師養成といった人材育成のためのコースを開発していく必要がある。

キルギス共和国で行った「日本・日本語に対する関心度調査」「日本語学習観」等の質的分析を進めて、求められる日本語学習デザインについてさらなる考察を進め、検討したい。

## 活動報告

### 2008年度第4四半期

#### 2009/3/4-6 社会科学特講(4)II

鈴木健人先生（広島市立大学国際学部准教授）が「国際関係史」に関する集中講義を行いました。

#### 2009/3/9-10 社会科学特講(1)II

宇山智彦先生（北海道大学スラブ研究センター教授）が「中央アジアの政治・民族・宗教」に関する集中講義を行いました。

#### 2009/3/9-11 社会科学特講(3)II

篠原琢先生（東京外国語大学）が「中央ヨーロッパにおける歴史と記憶」に関する集中講義を行いました。

#### 2009/3/16-18 人文科学特講(3)II

柘植洋一先生（金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授）が「エチオピアの多言語状況とアムハラ語」に関する集中講義を行いました。

#### 2009/3/16-19 社会科学特講(5)II

小林正英先生（尚美学園大学総合政策学部准教授）が「欧州統合の現在」に関する集中講義を行いました。

#### 2009/3/17 外部アドバイザー委員会

第2回外部アドバイザー委員会が開催されました。詳しくは、Newsletter No. 7で報告いたします。

#### 2009/3/19 講演会「欧州CEFR言語教育参照枠と日本語教育」

山田ボヒネック頼子先生（ベルリン自由大学日本学科准教授）をお迎えして、講演会「欧州CEFR言語教育参照枠と日本語教育：複言語力・複文化力の育成をめざして」が開催されました。

## 2009/3/31 第1期プログラム生が前期課程を修了

飯野知宏（歴史・人類学専攻）、李炅澤、磯田沙織、松枝世（現代文化・公共政策専攻）、長谷川詩織（文芸・言語専攻）、斉藤和美、ツァイ・マリナー、田中孝始（地域研究研究科）の8名が前期課程を修了し、坪井研究科長より修了証が授与されました。

## 第3期プログラム生 募集日程

詳しくは、IFERIウェブサイトをご覧ください。

2009年4月8日(水)	第1回説明会 18:00より人社棟B620にて
2009年4月9日(木)	第2回説明会 18:00より人社棟B620にて
2009年4月10日(金)	第3回説明会 18:00より人社棟B620にて
2009年4月20日(月)	書類提出期限(17:00まで) 提出先:IFERI事務局(共同利用棟A3階、302-2)
2009年4月22日(水)	面接
2009年4月24日(金)	合格発表
2009年4月27日(月)	オリエンテーション

## 活動予定

### Inter Faculty (欧文電子ジャーナル) 創刊のご案内

IFERIではプログラム生が異分野融合型研究の成果を国際的に発信することを支援する目的で欧文電子ジャーナル Inter Faculty (略称 IF) を創刊いたします。下記の投稿規定(案)をご覧ください。投稿希望者はIFERI事務局までお問い合わせください。

#### 1. 投稿資格

筑波大学大学院人文社会科学部研究科の構成員および在學生に限る。

#### 2. 論文の種類

論文、研究ノート、調査報告、書評の4種類とする。

#### 3. 論文の形式

使用言語は、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語のいずれかとする。英語の場合、日本語による要旨を添付すること。英語以外の言語の場合、英語と日本語による要旨を添付すること。

当該分野における国際的な学会誌・専門誌で用いられる形式に準ずる。

#### 4. 投稿方法

原稿募集に関する詳細はIFERIウェブサイトを通じてお知らせいたします。

#### 5. 採否の決定

投稿の採否はIF編集委員会が指名する査読者による査読を経て、IF編集委員会が決定し、投稿者に報告する。

#### 6. 雑誌の出版

IFは筑波大学大学院人文社会科学部研究科のサイトを通じて電子出版をおこなう。

### 高麗大学夏期集中特別プログラム生公募

この度IFERIでは高麗大学主催の2009年度夏期集中特別プログラムの参加学生を募集します。IFERIウェブサイトにて詳細を確認の上、参加希望の学生は応募してください。

高麗大学(大韓民国)では毎夏、協定校から派遣された外国人留学生(主に欧米系韓国人)のために、夏期特別集中プログラムを開設しています。2007年の実績では、12カ国、192大学から1495名が参加しました。学部生を対象としたハングル語をはじめとし、海外から講師を招聘するなど、英語による充実した講義が用意されています。

今回、留学生センターの協力を得て、IFERIは語学力(ハングル語、英語)を高め、国際感覚を養い、幅広い知識と経験を自らの研究課題に取り入れようという意欲のある大学院生を支援することになりました。IFERIでは往復旅費と滞在費の一部(15万~20万円程度)の支給、および「海外語学演習」(前期課程)、「プログラム演習」(後期課程)の一環として本企画を位置づけて、履修者には単位を認定します。

公募申請様式は、IFERIのHPまたはIFERI事務局で入手できます。応募は3月19日(木)~4月10日(金)正午まで、IFERI事務局で受け付けています。



## 次号CONTENTS

### 第3期プログラム生の顔ぶれ 平成21年度活動予定

報告:IFERI外部アドバイザー  
委員会

### 編集後記

◆平成20年度が終わり、8名の第1期プログラム生が前期課程を修了しました。彼らが後期課程でどのような新領域を切り開いていくかが楽しみです。◆来年度はGPの最終年度になります。GP終了後にこれまでの取り組みを研究科に根付かせていく道筋をともに模索する1年になればと願います。◆次号ニュースレターは2009年6月発行の予定です。(JI)

発行日:2009年3月31日

発行者:青木三郎(IFERI運営委員長)

連絡先:

筑波大学人文社会科学部研究科  
IFERI事務局(共同利用棟A302-2)  
〒305-8571

茨城県つくば市天王台1-1-1

電話・FAX 029-853-4091

[iferi@sakura.cc.tsukuba.ac.jp](mailto:iferi@sakura.cc.tsukuba.ac.jp)

<http://www.hass.tsukuba.ac.jp/iferi/>